

名雪隊長の

「遭難記」

8月6日

今日から2日間かけて奥穂高に登る。メンバーは私とI渡M子(通称Mポン)、M野J郎の3人だ。多少不安もあるが2人とも運動好きらしいので問題ないだろう。なんにしても穂高山頂の美しさを想うと不安はかき消える。

0800頃に上高地の麓に到着する。登山を開始する上高地には一般車が入れないのでタクシーに乗り換え、0830上高地に到着。本日の野営地である涸沢に向けて出発した。

本日の前半はひたすら平坦な道がつづく。スタート地点の上高地から見て涸沢は穂高山をぐるっと回り込んだ位置にあり、山麓の緩やかな登りをてくてく歩く。重い荷物を背負ってはいるが、登山と言うよりハイキング気分で会話も弾む。M野隊員は山歩きに慣れていないのか、はたまた大型のリュックサックが合わないのかもがき苦しんでいた。Mポン隊員はにこにこしていて問題なさそうだが、ペースは同じくゆっくりだ。そうして3カ所目の休憩地点にたどり着いたところには予定を1時間以上遅れていた。



ここからは3時間ほど登りがつづき、最後の方は特に急な斜面となった。他の2人はかなり苦戦しており、涸沢には予定より2時間ほどおくれて1630頃(だったかな?)到着する。

涸沢は上高地から山頂までの標高の中間より少し低い場所にあり、大昔は氷河が流れはじめていた巨大なカールだ。半周を急峻な山々に囲まれ、反対側は大きな谷がうねっていく壮大な光景だ。カールの底の岩がごろごろした場所にテントが群れをなしている。

(N雪隊長)

とうとう涸沢に着いた。M ポンと隊長は終始笑顔で登っていたが、自分がかつて経験しなかった重い荷物と長時間の歩きでとにかく足が痛かった。苦しい登りを終えてたどりついた涸沢には清水の飲み場があり、その味は格別だった。ごろごろの岩を避けられる場所を探し、みんなでなんとか2つのテントを設置する。足の疲れを我慢しながらテントを設置し、各自で用意した晩ご飯を食べたときはとても幸せだった。



明日は早いので、食事を片づけたら早々にテントに入る。

暖かい寝袋はこれもまた格別で、狭いテントも楽しくなるくらいだった。明日は9時間の長い道のりなので、隊長と予定より遅れた場合のプランを相談する。しかし、今日来た道を引き返す他にショートカットもなく、まあいいやということになった。

8月7日

夜明け前に起床した。一晩ぐっすり寝たら足の痛みもぱっちり忘れていた。涸沢カールの夜明けは壮観で、ついつい見とれてしまう。いそいそと準備をして0600いよいよ出発する。ここでひとつ計算を試みる。昨日は通常6時間の道のりに8時間かかったので、今日の行程を予測すると $9 \times 8 \div 6 = 12$ 時間となる。到着予測時刻は1800とかなりぎりぎりで、ひときわ気合いが入った。

(M野隊員)

山登りの朝は最高だ。登りはじめてしばらくすると、高山植物の花が咲く原っぱを通過する。隊長とMじろははりきっており、私も元気いっぱいになる。見通しの開けたカールの上の方からはなにやらヨーデルのような歌声が聞こえてくる。後ほどこれは山小屋のスピーカーから流れていたことが判明する。



1時間くらいたつたころだろうか、目の前のグループが、さらに先に行くおじさんおばさんたちとは違うコースを進んで行く。とりあえず目の前の

グループと同じ方に進むが、これはどうやら違う道...というか道ではないところであった。ごろごろの岩は次第に大きくなってゆき、しかも崩れやすくなってゆく。脚の長さや筋力にはハンデのある私はかなり体力を消耗する。そのとき突然！ゴロゴロと雷のような音がした。見ると、遠くの方で岩が崩落し、どんどん転がっていく。途中でコースを変えてこちらに来ないかと不安になるが、岩は割れて小さくなってゆき、静かになる。びびった。



疲れても笑顔

その後どうにか本来のコースに復帰し、稜線上の山小屋に到着する。ここから奥穂高までは稜線に沿っ

てほんの少し登るだけだが、これが恐怖の始まりであった。断崖に頼りなくとりついた鉄の梯子や鎖に登る私は、出初め式の消防士さんのように危険な気分だった。

しかし、そうした苦労の末たどり着いた頂上は、下界が雲で覆われてまるで天上のようだった。隣に切り立つジャンダルムと呼ばれる切り立った山頂も、ときどき雲に隠れたりして幻想的な眺めだった。



頂上にて

眺めをしばしたんのうした後、さらに稜線を進み続ける。ここは小さな上り下りが続き、今にも滑落しそうな場所もあってスリリングだった。怪我でもしたら素も子もないので慎重に進むが、ペースはかなり遅くなる。そのうちちょっぴりお腹も痛くなってきた…。

(I 渡隊員)

奥穂高山頂から続く稜線にはときどき人が滑落するような険しいポイントがある。十分注意すればそれほど危険でもないが、なかなか骨のあるコースだ。I 渡隊員は慎重になり始め、急にペースが落ちる。体調も悪そうだ。そうして1時間くらいゆっくり進んでいるうち、先行きが心配になってくる。このままでは夕暮れまでに次の山小屋にもたどり着かない！そこで、体力のある私とM 野隊員とで、自力でがんばろうとする M ポン隊員を説得し、荷物をシェアする事にする。そんなこんなで、やっと稜線から下る分岐点(紀美子平)にたどり着く。



(N 雪隊長)

(これ以降、写真はほとんど残されていない)

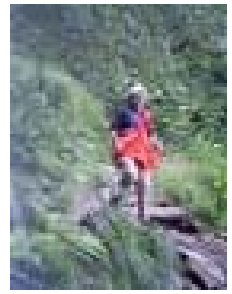
紀美子平を過ぎればあとは楽な下りと聞いていたが、下りの勾配はとても急で、鎖場がつづいたり、岩を降りるような場所がずっと続く。時間が迫っているので一生懸命降りるが、体力的にはかなりきつく、そのうち土砂降り雨が降り出し、岩はますます滑りやすくなる。隊長と M じろも限界近いようで、荷物を交代する時間はどんどん短くなっていく。もはや汗と涙の決死行になっていた。

そうこうするうち下りは緩くなってきて、とうとう山小屋(岳沢ヒュッテ)にたどり着く。山小屋のテラスでの休憩は心底ほっとした。

このとき時刻はすでに1800。目的の上高地までは林の中を通常で2時間かかる。隊長は1900には暗くなるというが、あまり気にしている風でもなかった。私も正露丸をゲットして体調が回復した。

次の日はみんな仕事があるので全力で上高地にたどり着こうという M じろの意見に賛同し、ラストスパートをすることになる。普通に考えればどんなにがんばっても到着は 1900 を過ぎるはずだが、汗と涙の決死行をやりとげた私たちに理屈は無用だった。

(I 渡隊員)



走る！I 渡隊員

岳沢ヒュッテを出発して最初の 30 分は隊長の先導でかなりの勢いですすんだ。しかし、そのうち M ポンのペースが急に落ちてきて、自分も再び足が疲れて痛くなっていく。しかも周囲はどんどん暗くなって行き、とうとう真っ暗になってしまった。林の中なので暗くなるのは 1900 よりずっと早かった。M ポンのペースを維持するために再び荷物をシェアする。自分から言い出したものの、足の疲れは既に限界を越えていた。明るいうちはそれぞれ自分のペースで休んだり追いついたりしていたが、こうなってくると先導する隊長だけが頼りだ。暗闇の中、とても一人で休む気になれないが、他の 2 人はいつまでたっても休もうとしない。頭の中は足の痛みでいっぱい、だんだん訳が分からなくなってくる。苦痛から気をそらせるため、帰ってから入る暖かい温泉や、今晚のベッドをひたすら思い描いた。そして 2015、とうとう上高地に到着する。

助けを求めて手近な温泉旅館を訪ねると、駐車場への道路は 2000 に閉鎖されてしまい、明日まで上高地から出られないとのこと。その晩は旅館もホテルも何処もいっばいで、期せずしてキャンプをもう 1 晩楽しむことになった……。

(M 野隊員)

教訓：ペース配分等を万全にするという基本事項を今後の課題としたい。(I 渡隊員)